



共翔

第22号



● 目 次 ●

【学生座談会】 私たちの「理想の図書館」 2

【ラーニングcommons日誌】

- ・本を読むサークルを作りたい 阿部 桃子 6
- ・ビブリオバトル大会への参加 榎本 ゆめ 6

【図書館セミナー報告】

「夢二の「生活美術」という夢」 8

【ユーザーズガイド】

マイライブラリ機能が使えるようになりました！ 9

【ブックガイド】 10

【反転授業】 主体的学びへの潮流と反転授業 中西 徹 12

【ブックハンティング】

- ・第1回ブックハンティング報告 14
- ・ブックハンティング体験記 15

【利用者へのメッセージ】 ラーニングcommonsのご案内・夜間開館21時までに寄せて

- ・第2回ブックハンティングの開催予告 16

※ポップアップは「ブックシェアサークル」の手製です。



私たちの理想の図書館

表現文化学科 2年 井上 純
表現文化学科 2年 中村 愛

表現文化学科 3年 石井 優吾
表現文化学科 3年 坂本 千紗
表現文化学科 3年 浜崎 加奈

しばらく以前から全国的に「図書館改革」の動きが高まっているのは、周知のとおり。中でも、千葉大学の「アカデミック・リンク」の試みはその模範的な一例とされます。日比谷図書館や東京外国語大学図書館の果敢な変革も注目されます。しかし、千の図書館があれば、千の改革の試みがあるのも確かです。また、短兵急に鑄型に嵌めこめばいいというものでもない。では、どうするか。まずは学生諸君の忌憚ない考え・意見に耳傾けてみたいと思います。

図書館というシステムにさまざまな形で関わる人々の小さな気づきや疑問から何かが開けていくかもしれません。グランド・プロジェクトの重要性もさることながら、同時に「神は細部に宿れり」という言葉も嘖みしめたい。たとえば、「図書館は静謐な空間をもって旨とする」、それはその通りなのですが、時としてそれが抑圧的な空間と化してないか。自由に討論ができる場もほしい……等々、学生諸君にはまだまだ語り足りないことが沢山あるようですが、今回はそうした動きのイントロとします。

(図書館長)

▶図書館への要望

石井 図書館で飲み物を飲みながら読書できたらいいな、と思います。かといって、紙の天敵は水分なので実際にはなかなか難しいとは思いますが、そこを何とかできないのかな。閲覧室でページを繰りながら、そんなことをぼんやり考えたりしています。

中村 私は、この大学の図書館はちょっと静かすぎるんじゃないかな、と思うことがあります。もっとも、ここの図書館に限った話ではないですけど……。小さい話し声や足音でもすごく響いてしまうから、あまり長居したくないな、と感じてしまいます。そこをどうにかできないかな、って。これも今の図書館制度から

すると、なかなか難しいんでしょうけど。井上 私も、飲み物をどこでも飲めるようにとまでは言わないんですけど、今二階にブレイクコーナーがあるので三階にも設けたらいいんじゃないかな、と思います。あと、レポートを作成したり調べ物をするのにパソコンを利用することも多いと思うのですが、パソコンをもう少し増やしてもらえたら、と。利用する人でいっぱいになっていることが多くて、使いたいときに使えなくて不便だと感じます。個室の閲覧室を使うまでもないことの方が多いので、個室以外のパソコンをもっと増やしてもらえたらいいなと思ってます。これって、そんなに贅沢な願いじゃないでしょ。



座談会風景



ちょっとした質問が気軽にできる、
そんな空間であってほしい。
ユーザーの意識にも関わるけど、
些細な不便さがひっきり
になることもある……

浜崎さん



坂本 私は、井上さんがおっしゃったオープンに使えるパソコンがもう少し欲しいというのとは逆なんですけど、パソコンをなくして閲覧室をもう少し増やしてほしいと思っています。

個室の閲覧室のようなところって、どうしても卒論を書く人とかが優先的になってしまうので。それは図書館に限ったことじゃなくて、どこかにそういう部屋を設けてもいいっていうのもあるんですけど。どこかそういう風にもう少し個室のパソコンがあれば、私たち1年・2年・3年の学生も利用しやすいんじゃないかと思います。

あと、中村さんがおっしゃってみたい少ない話し声でも響いてしまうっていうのだと、どこかの図書館で勉強部屋みたいな部屋を一つ設けて、討論などをする人はこの部屋でしゃべるようにしているっていうことを聞いたことがあるので、大学の図書館にもそういう部屋が一つ、っていうかもっとあってもいいんじゃないかなと思います。たとえば、一冊の本をめぐるってちょっとした話し合いなどする時、「そう言えばあの本は……」なんてその場で参照したいことがありますよね。そんな場合、すぐその本を探して持ってきたりとか……。

浜崎 私も、図書館ってどうしても静かすぎるなっていうか、少しの話し声でも

響いてしまうから、資料が一人で探せなくて友達に聞いたりとかそういう時に小声で話しても、思っていたよりも響いてしまうのが気になります。響いてしまうことで、周りの人の迷惑になってしまうので、それが困るなと思いました。

図書館には勉強のために来ている人が多いので、その中で大っぴらにしゃべるのはもちろんダメだと思うんですけど、質問とかそういうことが気軽にできる空間であってほしいなと思います。もっともこれは、図書館の制度だけの問題じゃなくて、ユーザーの意識も関わることだと思うんですけどね。あと、井上さんがおっしゃっていたブレイクコーナーが三階にもあっていいんじゃないかなっていうのは私も同感です。「二階に降りればいいじゃん」と言われるかもしれないけど、ちょっとした不便さがひっきりになることもあるんで。これって、わがままですか？

一同 そんなことない。わかる、わかる。

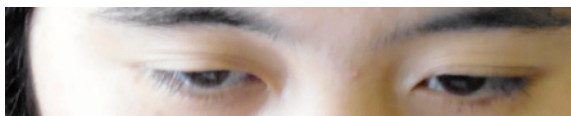
▶さまざまな利用のしかた

石井 建築家の話を読んだことあるけど、設計する時に、その空間を利用する人がふだんどういふ動きをするかっていう動作線を考慮するんだと。そのへんが関係するんじゃないのかな。

坂本 そうね。いま、図書館で、いろん

石井くん

いろんな利用のしかたが
あっていいでしょ。
書架の間をブラブラ歩くとか。





三階にもブレイク・コーナーを。
個室の閲覧室だけじゃなく
もう少しパソコンを気軽に
使えるコーナーがあってもいいかな。

井上さん

な人がいろんな目的で利用するでしょ。
浜崎 そう。読みたかった本が入ったから来る人、調べものをする人、データベースなどでいろんな検索をかける人、ラーニング・コモンズみたいなことで利用する人、試験前で勉強する人、それから……

井上 単に眠りにきたりとか(笑)。

中村 本を読んでるうちに、いつの間にか寝ちゃう(笑)。

一同 ある、ある。

石井 とにかく、いろんな利用のしかたがあるよ。

今でもやってると思うけど、前にね、「図書館探検隊」というのがあったでしょ。「あ、ここにこんな本がある。こんなコーナーがあった」なんて、図書館をいろいろ「探検」するっていう。

坂本 そうね。ここには結構いろんな本が入っているから、単に「勉強」するだけじゃなくて、書架の間をブラブラ歩いたりして(って言うのと叱られるのかしら)、知らなかった本に巡り合うのもいいと思うけど。

中村 賛成です。

井上 「未知との遭遇」(笑)。

浜崎 出会って大切ですよ。

館長 そうだね。「一期一会」ってみんな言うけど、図書館の利用のしかたに即してみると、あたら豊かな出会いが意外にやり過ぎられていることもあるかもしれない。

余計なことだけど、アルゼンチンの詩人・作家・批評家にホルヘ・ルイス・ボルヘス(1889-1986)というすごい人がいて(日本にも来たことがあるけど、その時はほとんど盲目状態だった)、長年にわたってプエノスアイレスの国立図書館長も務めたけど、その著作の背景には古

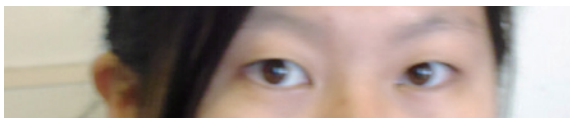
今東西の該博な知の涉猟・集積が窺える。とってそれをペダグチックにひけらかすわけでは決してない。この人の異名はそれこそ「理想の図書館」かてな感じ。イタリアの記号学者にしてたとえば『薔薇の名前』の世界的ベストセラー作家でもあるウンベルト・エーコという人もいる。こういう存在にも出会ってほしい。

▶ありうべき図書館とは

坂本 図書館は、県立図書館とその他の図書館で存在意義が違うと思います。県立図書館とか国立国会図書館っていうのは、本を保存しようとか残していこうっていう意味があるっていうのを聞いたことがあります。図書館ってやっぱり、市立図書館とか中央図書館とか、大学の図書館で本の扱いとか本を何万冊所蔵しているとかかそういうのが違ってくると思います。

本の扱いは、やっぱり大切に扱った方がいいと思うんですけど。飲み物を飲みながら読んでもいいと思う、さっきの繰り返しになるかもしれませんが。たばこを吸いながらとかそういう風を読むのは公共の場である図書館じゃまずいけど、自宅とかだったら別に構わないわけでしょう。

でも、県立図書館や国立図書館みたいに本を所蔵する場所においてそういうことをしたら、後々残さないとはいけないものまで汚してしまう気がしてしまいます。そういう大切なものを汚してしまうっていうのはよくないのは当たり前。でも本っていうのは、読むこととか内容自体に意味があるものだと思うんで。大学の図書館とかそういうところにある本は、大学生や先生方が利用するようになるものなので、より読むことに意味があるっ



いわゆるラーニング・ commonsの
部屋をもっと設けて、
閲覧室との「住み分け」を
したらいい。
従来の図書館イメージを変えてほしい。

坂本さん



ていう風に私は思います。

浜崎 なんか大学の図書館を利用する時が、それぞれレポートが出た時とか、今先輩方がしているみたいな卒論の時とか、そういう必要な時だけに利用するみたいな人が多い気がします。勉強したりとか、他にも何か自分の趣味の本を読むとかでもいいから、もう少しいろんな形で利用する人が多くてもいいんじゃないかなと思いました。それこそレポートとかそういうことに追われて、直前になって図書館に足を運ぶ人がうちの大学では多すぎるのかな、と思います。

館長 やはり使い方っていうことになってくると思うんだけど、自分で図書館っていうものをもっと身近なものにするってことが大切になってきますね。そのための努力や工夫を図書館側としてもっとやらなければならない。

制度的なレベルでの改革・改善が大事なのももちろんだけど、制度と言うのは、その利用者と不可分にして相関的でしょう。その意味では、ユーザーも「主体的」に関わってほしいな、と。「主体的」ていうのは便利な言葉なんだけどね。

坂本 個人的に、入りにくいなっていうこともあるんだと思います。階段上がって二階にあるってのが、どうにも入りにくいなって感じてしまいます。今までの中学校や高校とかだと、学校の建物

の中に図書室があったじゃないですか。それにあの、学生証をかざして入らないといけないうってのもなかったです。今までだとなんか暇だなんて思ったら行ったりできたんですけど、道路の向こうにあって、さらに中に入って階段を上がって、学生証をかざさないといけないうってのが個人的にはだるいなって感じてしまいます。

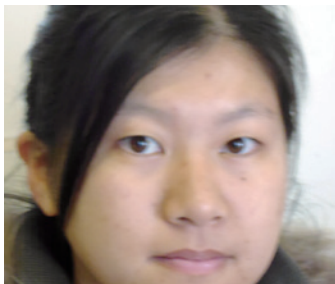
館長 うーん。わかるけど、なかなかむずかしいね。でも、そういうちょっとしたことに新しい展開の芽があるのかもしれない。

つままない思い出話を言うと、僕の高校の図書館っていうのが、ドアを開けて裏庭に出るとそこに芝生の庭が広がって、昼休みにそこに本を持ち出して寝っ転がって読んだりして。ちょっと傾斜のかかった庭だったんで、自然のベッドみたいで。そのうち寝てしまって、午後の授業に遅れてしまうっていうこともあった。今の図書館とかだと、勝手に本を持ち出そうとしたらブザーが鳴ったりするからね。それがよくないっていうわけではないけど。

石井 先生のおっしゃっているように、芝生に寝っ転がって本を読むとか、そういう自由な空間で読書できるっていいですね。(了)

中村さん

「静か」なのはもちろん大切なんですけど、静かすぎるというのもね……。あんまり長居したくないなっていう空間もどうなのかしら。





「本を読むサークルを作りたい」

そう帰りの電車の中で友人たち——現在の幹部2人——と話し合ってから、約1年が経ちました。当時は他愛もない夢物語でしたが、今現在、図書館の方々のご協力の下にそれは現実になろうとしています。

きっかけは表現文化学科の中西先生の講義でした。「最近大学生で本を読む人が少ない」という問題に、学生がグループディスカッションをして対策を考える、という内容でした。その授業を通して、私は大学生がなぜ読書から遠ざかってしまっているのか考えました。アルバイトなどで時間がない、学校での空きコマが少ない、図書館が校舎から少し遠く近寄りがたい等々……。小学校から高校まであった読書をする余裕が、いまの大学生にはないのではないかと。あったとしても、他のことに時間を費やしているのではないかと。こういった考えが浮かびました。

また、たとえ本を読んでいたとしても、偏ったジャンルになりがちなことには気づきました。自分の興味があるジャンルしか読まない人が多いのです。

それらを解消するにはどうしたらよいのか。そこで私たちは図書館とはまた別に「気軽に読書ができる場所」があればよいのではないかと考えました。

5分でも1時間でも、ゆっくりと校内で読書ができるスペースがあれば、読書量は増えるのではないかと。元から読書をする人をターゲットにした、読書を活性化させるためのサークルを作りたいと思いました。以前から「本に関するサークルを作りたい」と考えていたのですが、この授業を受けたことによりその案が具体的になったように思えます。

しかし、いざ同好会として申請すると様々な問題が出てきました。特に大きい問題は、同好会は部室を持っていないことでした。

私たちは部室というスペースに本を置くことで、普段は読まない異なるジャンルの本でも気軽に手に取れるようになると

考えていました。しかし、部室が持てないとなると、異なるジャンルの本をどうやって教えあったらいいのかが、悩みました。

そんな時、顧問の山本先生（図書館長もされています）が図書館との連携を提案してくださいました。図書館の掲示スペースを借りて、季節の展示や書評を掲示してみないか、というものでした。

とてもありがたい提案で、ただ漠然と「本を読むサークル」だったものが、「図書館と連携して幅広いジャンルの本を紹介する」ことができたのです。これまでに2度展示に関わらせていただきましたが、放課後を使い展示物を作成することはとても達成感を得られるものでした。

図書館と連携することで、より幅広い活動を行うことができます。これからも活動を続け、多くの人に読書に興味を持ってもらえればと思います。

（阿部 桃子）

ビブリオバトル大会への参加

私たちブックシェアサークルは10月26日に開催された「岡山市内大学生 予選会」に参加しました。岡山県立図書館にある一室を借りてのビブリオバトル。今回は傍聴者としての参加、そして一時間半という短い時間ではありましたが、大変貴重な時間をすごしました。

ところで皆さんはビブリオバトルというものが何なのかご存知でしょうか。私も名前と自分の好きな本を伝えるということだけしか知りませんでした。私と同じ他の参加者も知っている人は少なく、初めての人がほとんどでした。では、ビブリオバトルでは何をするのか。詳しくお知らせしたいと思います。

挑戦者は6名の学生。一人の持ち時間は5分と定められており、極力その時間設定を守らないといけません。その後すぐに質疑応答の時間が2分設けられています。挑戦者とその本が出合った切っ掛けや、お勧めの場面を聞くなど簡単に気軽



POP 作成中

な質問がほとんどです。ピプリオバトルは、本を通して気軽に楽しめるコミュニケーション

ンゲームでなければなりません。挑戦者に対する非難や本に対する評価はありません。挑戦者は面白いと思った本を持参します。スピーチ用の原稿やメモなどの持ち込みは禁止されていますが、本に貼ってある付箋はそのままでも大丈夫だそうです。スピーチ中にその付箋の所を開いて紹介しやすくする為でしょう。中には朗読する人もいました。さて、以上が私も知らなかったピプリオバトルのルールです。全ての紹介が終わったら投票に入ります。今回は文字通り予選会なので、ここでチャンピオン本に選ばれた人が地区決戦に出場できるということです。地区決戦は岡山県立大学で11月15日に開かれ、そこでチャンピオン本に選ばれたら京都決戦に出場できるという流れです。今回この本がチャンピオン本に選ばれたのはまた後ほどご紹介します。

ここまではルールや流れを紹介してきました。ここからは6名の挑戦者がどんな風に紹介したのかを述べたいと思います。皆一様に本のタイトルや内容から入る人はいませんでした。まず、その本に関連のある話から始めるのです。そうすると、今から何が始まるのだろうかとか、本と何の関係があるのだろうかとか色々考えました。そこが少し面白かったです。例えば、「皆さんは旅行が好きですか。その時がが一番心に残りますか。風景、建物、人、色々あると思います。でも、僕が一番心に残るのはご飯です」と言うのです。この出だしに、何が始まるのかとわくわくしませんか。思わず背筋を伸ばしてしまいました。それ程彼の話引き寄せられたのです。『ものくうひとびと』という本を彼は紹介しました。この本は食の話だそうです。しかし、ただのグルメ本ではないと強く念を押されました。旅が好きな著者が訪れた場所で様々なご飯を食べるノンフィクションストーリー。明るいことだけでなく暗い部分もある。朗読をしてく



れましたが、まさに人間の影ともいえるでしょう。そんな繊細な部分もありながら小学生でも読めるというのだから驚きです。是非読んでみたいという気にさせられました。彼も楽しそうに本を紹介しており、本当に本が好きなのだと分かりました。彼以外にも感情が入りすぎて泣きそうになる人もいました。本に合わせたような口調、雰囲気、問いかけるような、訴えかけるような気持などが伺えました。みな一生懸命、時間一杯使ったスピーチで、面白かったです。挑戦者も参加者も楽しい時間が過ごせたのではないのでしょうか。

6名の挑戦者によるスピーチが終わった後は投票に移ります。どの本も読んでみたいとは思いましたが、一番楽しそうに話してくれた彼女の本『円卓』を私は選びました。そしてその本がチャンピオン本に選ばれました。映画にもなるほどの人気作品ですが、彼女は小説で読んでほしいといました。本が見せる魔力を感じてほしい、そして人生について考えさせられる本でもあるといいます。その言葉に私は惹かれました。

やはり一時間半という短い時間でしたが、とても充実した時間でした。自分だけで本を読むのではなく、その本の魅力をいかに他者に伝えるのか。何度も何度も読み返す必要があると私は思いました。こうしてより多くの人と同じ気持ちを共有するのでしょうか。

遅くなりましたが挑戦者6名の紹介本を載せておきます。

『円卓』 西加奈子著
『白いメリーさん』 中島らも著
『もの食う人びと』 辺見庸著
『凍りのくじら』 辻村深月著
『心霊探偵八雲』 神永学著
『夜は短し歩けよ乙女』 森見登美彦著

(栩本 ゆめ)

◎ブックシェアサークル

毎週月曜日に図書館 4 階ラーニング
コモンズで活動中。

代表者：阿部 桃子（表現文化学科3年）
s1412002jh@shujitsu.ac.jp

第5回就実大学図書館セミナー 「夢二の「生活美術」という夢」

11月22日(土)13時30分から、第5回就実大学図書館セミナーを44名の参加者を迎え開催しました。講師は子川^{ねがわ}さつき先生(夢二郷土美術館学芸員)と本学の加藤美奈子先生(就実短期大学准教授)でした。

このセミナーでは、まず加藤美奈子先生より「夢二の生涯」について説明があり、引き続き、子川先生による夢二の「生活美術」についての講演がありました。



竹久夢二は2014年生誕130年を迎えた岡山出身の画家であり、詩人としても有名です。彼の描く愁いをたたえた美人画は「夢二式美人画」と呼ばれ、大正ロマンを代表する画家であり、「女十題」「黒船屋」「立田姫」等の数々の名作を残しています。

その一方で、彼の生きた大正モダニズムの時代は、都市生活者が急増し、今日の先駆けである大衆文化が花開いた時代でもありました。その動きのなかで夢二は、職業画家として、楽譜や書籍の装丁、広告ポスター、絵はがき、日用雑貨・浴衣のデザインなどを数多く手がけました。これは、夢二の“生活の中に美を届けたい”という思いからで、「どんたく図案社」という、日用品のデザインから広告コピー(キャッチフレーズ)、室内・外装のデザイン等、あらゆる装飾を手がける会社を結成の試みにまで至りました。

「どんたく図案社」は関東大震災のため、潰滅しましたが、その後も夢二はあらゆるもののデザインを手がけ、近代グラフィックデザインの歩みに大きく貢献しました。

また、文筆の分野でも、数多くの詩・歌謡・童話など創作しており、かの有名な「宵町草」は、夢二の詩に曲が付けられて、全国的な愛唱曲となったのは周知の通りです。

セミナー終了後は、図書館2階に展示した、本学所蔵の夢二資料を閲覧していただき、講師の子川先生とも歓談していただきました。

参加者の大半は、「夢二の新たな一面を知り、有意義なものであった。」という感想でした。中には、「美人画と女性との浮名ばかりの夢二像から、こんなにもたくさんの生活に密着したデザイン(楽譜や書籍の装丁、日用雑貨・浴衣デザインなど)を残しているのには、驚きでした。」と云った感想も寄せられました。



次回も皆さんの期待に応えられるよう、より充実させていきたいと思っています。どうぞご参加ください!



「夢二郷土美術館オリジナルグッズ」
「星まつり」のしおり



マイブラリ機能が使えるようになりました！

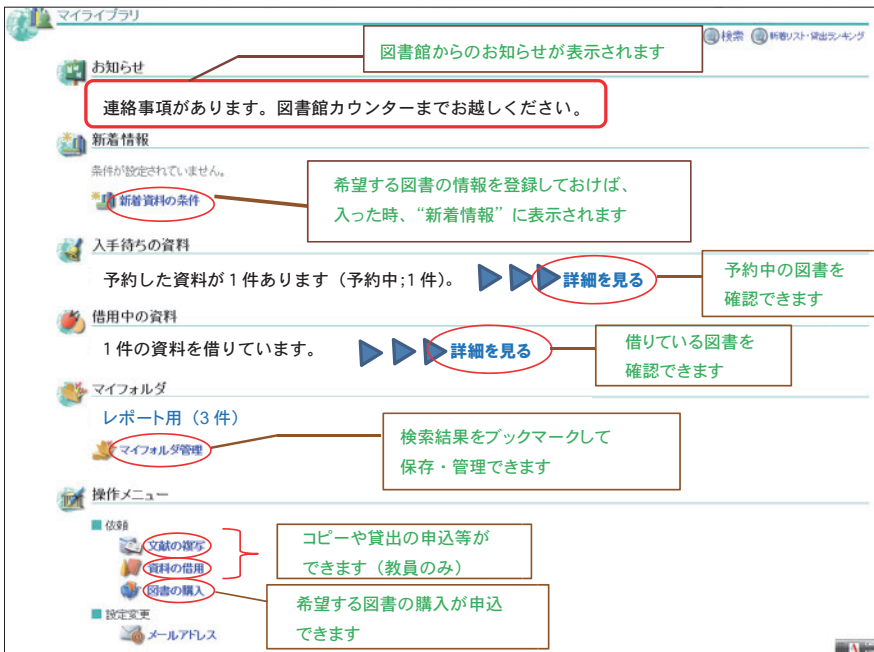
マイブラリでできること・・・便利な機能がたくさんあります。

- * 今借りている図書や予約中の図書を確認できます。
- * OPACの検索結果をブックマークして保存しておくことができます。
- * 自宅や研究室のパソコンから資料の取り寄せを依頼できます。(教員のみ) etc..

【マイブラリ(図書館 Web サービス)の使い方】

マイブラリを使うには・・・IDとパスワードが必要です。
→学内PCにログインするときのIDとパスワードがそのまま使えます
＜マイブラリへのアクセス＞

- ① 図書館メニュー画面にある **My Library** ボタンをクリックしてください。
- ② IDとパスワードを入力



河野裕『いなくなれ、群青』（新潮文庫nex）



なくしたものは、何か。心をつつ青春ミステリー。

11月19日午前6時42分、僕は彼女に再会した。誰よりも真っ直ぐで、正しく、凛々しい少女、真辺由宇。あるはずのない出会いは、安定していた僕の高校生生活を一変させる。奇妙な島。連続落書き事

件。そこに秘められた謎…僕はどうして、ここにいるのか。彼女はなぜ、ここに来たのか。やがて明かされる真相は、僕らの青春に残酷な現実突きつける。心をつつ新時代の青春ミステリー、「階段島」シリーズ。

（本のオビから）
 <物語の舞台は「階段島」と呼ばれる孤島。気づけばこの島にいたという人たちがここで暮らしている。この島を出るには、“自分”が失くしたものを見つけなければならない。

主人公の七草は階段島での安定した学生生活を気に入っていたが、真辺由宇と再会したことで、島の謎や連続落書き事件に関わらざるを得なくなる。>

七草や真辺由宇、そして島に暮らす人々がなくしたものは何か。階段島の存在とは何か。読後には自分について考えさせられる一冊。（表現文化学科3年 吉長知子）

横山秀夫『動機』（文春文庫）



この本は、ドラマ化されたこともある「動機」を含む四篇のミステリー小説です。

“動機”は、警察手帳を署内で一括保管し、紛失事故ゼロを目指そうという試みをしようとして導入していたが、金庫に保管されていた三十冊もの手帳が紛失してしまう話

です。この警察手帳が大量になくなるというシチュエーションを考えただけでもわくわくしますが、結末に関係するタイトルにもある“動機”がすごいものなんです。

女子高生を殺害して十二年間刑務所にいた山本が、謎の男から突然電話で人を殺して欲しいと頼まれる“逆転の夏”は、様々な人の複雑な想いが混ざり合っていて、読み終わった後に切ない気持ちになります。そして謎の男の本当の目的を知ったときは、きっとビックリするはずですよ。

全て短編なので、時間がちょっと空いたときにでも是非読んでみてください。（表現文化学科3年 今村裕美）

重松清『かあちゃん』（講談社文庫）



「同僚を巻き添えに、自らも交通事故で死んだ父の罪を背負い、生涯自分に笑うことも、幸せになることも禁じたおふくろ。」

事故は、カーブでセンターラインをはみ出してきた対向車のトラックが原因でした。しかし、車同士の交通事故の場合、過失割合に片方がゼロというのはありえません。これに対し、ただ助手席に乗っていた同僚は完全なる被害者です。おふくろは被害者家族に償うために幸せや笑顔を封印しました。この生活はその後二十数年に渡って続くこととなります。

このおふくろの息子であるヒロシは事故が起こった時まだ小学校に入学したばかりでした。父を亡くした悲しみと優しかった母の豹変に戸惑い、傷つき、そして長い年月をかけて母の幸せを願いながらも諦めて自身の家庭を築いています。そんな中、おふくろが心筋梗塞で倒れたという連絡。そして倒れた場所は夫が巻き添えにしてしまった同僚の墓の前でした――。

今回おふくろの息子であるヒロシの視点にスポットを当てましたが、『かあちゃん』は様々な人物の視点で展開されるオムニバス形式の物語です。ヒロシのおふくろの行動に衝撃を受けて影響されていく人々、各人物が母親に抱いている複雑な想い。私は第一章から泣いてしまいました。秋から冬にかけて一人のとき読んでみてほしい一冊です。

（表現文化学科3年 原田海倫）

神永学『山猫』（角川文庫）

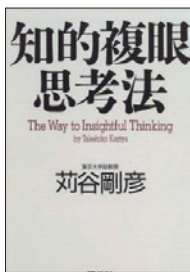


平成のねずみ小僧か、大泥棒か!? 痕跡を残さず窃盗を繰り返して、悪事を暴く謎の人物。現場に残された“山猫”の張り紙。鮮やかに金を盗み、姿を消す山猫とひよんなことから巻き込まれた勝村の活躍を描く、アクションミステリー。彼はいったい何のために盗むのか…

ある日出版社社長が殺された。“殺しはしない”ことを窃盗の信条とする“山猫”が殺人犯として浮上する。一体何があったというのか、その謎に迫るライター勝村。この二人の出会いが何を意味するのか、“山猫”を追う刑事であるさくらと関本は逮捕できるのか? 『心霊探偵八雲』のあの二人も登場!! 緊迫感あり、笑いあり、恋愛もありな、ピカレスク・アクション・ミステリー。現在三巻まで発売中。是非ご覧ください。

（表現文化学科3年 榎本ゆめ）

荻谷剛彦『知的複眼思考法』（講談社）



まず、1つ質問をしたい。大学の講義で、あなたはレポートを課され、きちんと提出した。そして、次回の授業で、そのレポートが返却された。そのレポートには「C」というアルファベットがついていた。あなたはなにを感じただろうか。丁寧にやったのに、「C」か、という不快感だろうか。それとも、まあ、こんな

もんだろうという、満足感か。それとも、何も感じないか。多くの人は、「C」か、嫌だなあ、と感じるのではないか。

しかし、ここで、教授が言う、「その「A」とか、「B」とかってなんだと思う。それは、僕が遊びで書いただけなんだ。」と。恐らく学生は、どうしたことだ、という疑問の表情になるだろう。

これはこの本の冒頭で紹介されるエピソードだ。このことから、多くの人が何も気づかないうちに、レポートのアルファベットに意味を持たせていることがわかる。元々、ただのアルファベットなのに。このような例は多くある。私たちは、普段、何か、問題などが起こった時に、それらしい説明を受ければ、ああ、そうか、と、納得していることが多いように思う。しかし、物事はそのように簡単ではなく、何かと何かに関連しあって起こっている。その、関連に気づかせてくれる本がこの、「知的複眼思考法」である。例えば、物事を時系列で捉えること、複数の関係性の中で捉えることなどの具体例を示しながら、書かれている。

特に、ニュースなどを見て、いつも、ああそうか、そういうことか、と納得してしまっている人にお勧めの本だ。ぜひ、読んでみてほしい。

(経営学科 片山 魁)

森見登美彦『新釈 走れメロス 他四篇』（祥伝社文庫）



『山月記』『藪の中』『走れメロス』『桜の森の満開の下』『百物語』読んだことがある読書家も、読もうと思って読んでない積読家も、森見登美彦先生の作風でどうぞ一度読んでみてください。読了後、本家を読み直してみたくなるかもしれません。

美しき青きドナウに桃色ブリーフで踊り狂うというミスマッチに笑った後（『走れメロス』）、美しい女に出会い、一般のうかつの上げられない人生を一般的成功者の道へと矯正されてゆく男の話に恐怖（『桜の森の満開の下』）。「やってなんになる」「意味があるのか」「誰が得をする」「ばかげている」これらの行為に本作の『腐れ大学生』は意味を見出す。こんなどうしようもない愛すべき『腐れ大学生』に私は憧れずにはいられない。

(表現文化学科3年 池田千代子)

太田紫織『櫻子さんの足下には死体が埋まっている』（角川文庫）



古今東西、ミステリーには色々な探偵がいます。謎を解くのが好きな探偵、事件に出会うことが好きな探偵、食べることが好きな探偵……。

しかし、骨が好きな探偵役というのは彼女、櫻子さんだけではいいでしょうか。

『櫻子さんの足下には死体が埋まっている』という物騒なシリーズタイトルの通り、彼女は行く先々で死体と遭遇します。標本を生業としているために自ら生き物の骸を探する場合もありますが、大抵は何かしらのハプニングにより見つけてしまうことがしばしばです。その骨から分かる事実だけを読み取り、隠された真実を解き明かしてしまいます。

そんな彼女の愛する骨トークに耳を傾けながら、個性豊かな仲間たちの送るちょっぴり非日常な物語をのぞいてみてください。読み終わったとき、あなたも骨マニアの1人…櫻子さんファンの1人もかもしれません。

(表現文化学科3年 横山真実)

加納朋子『モノレールねこ』（文春文庫）



8編の心温まる話がつまった短編集です。デブで不細工な猫の首輪を通じた文通のお話や、幽霊の婚約者をもつ男の人と契約結婚した女の人の結婚生活、亡くなった子どもと一年に一度だけホテルで再会するお母さんの話、子どもを見殺しにしそうにするようなダメな

父親とその息子の話、そしてザリガニが主人公のとある一家の話など。そのほかにもパズルを趣味にする主婦の話や、頼りない叔父と二人で生活することになった少女の話、コネでラーメン屋の店長になった男の話といった、どれもほんのりあたたかいやさしいお話ばかりです。

特にザリガニが活躍する「バルタン最後の日」がとてもよくて、思わずバルタン……！と感極まってしまうこと間違いなしです。

どれか一つでも気になった方はぜひこの本を読んであたたかい気持ちになってみてください。

(表現文化学科3年 高橋佐知)

主体的学びへの潮流と反転授業

—歴史的意義とその展開—

薬学部 薬学科 教授 中西 徹

昨今、アクティブラーニング、ポートフォリオ、ルーブリック、ラーニングコモンズといった主体的学びに関するカタカナ用語が教育には欠かせない時代となった。グローバル化、情報化、高齢化などに伴う社会の構造変化に対応した人材を輩出するべく主体的に考える力の育成を求めた、一昨年8月の大学教育の質的転換に向けた中教審の答申以来、多くの大学が、もはや従来のFDに留まらないEducational Developmentというべき教育改革に積極的に取り組んでいる。このような主体的学びの潮流はいつどこからやって来たのか？ またなぜ今必要なのか？

リベラルアーツから始まった高等教育が次第に大衆化したこと、さらには、特に米国ではベトナム戦争の敗北等によって社会構造が揺らぎ、高等教育のあり方が問われた上に、若者と社会との関わりに亀裂を生じたことが、その後の教育改革やキャリア教育出現の契機になったと言われている。この改革の中で1980年代から従来の講義形式の授業でない学生中心型の教育が進められ、さらに1990年代からはICTの発達と共に反転授業が始まって、ハーバード大学のエリック・マズール教授らがこれを推進した。

我が国では、高度成長期まではいわゆる近代化した大学像を一貫して追求してきた。そして、バブル崩壊後の景気の低迷による社会の変化等に伴い、高等教育においては従来の大学像を打破すべく、1991年の大学設置基準の大綱化によって教養部の廃止等を行ったが、これに引き続く少子化や新設大学の急増等による入学者の減少と質の低下、社会のグローバル化、高度情報化などの様々なストレスによって、大学の教育の質は低下し大学間の格差が広がった。これに加えて、社会の構造変化に対応できる問題解決能力を持つ有用な人材育成の要請が高まってきたことなどが、上記の答申による主体的学びの我が国での取り入れや潮流の形成、さらに教養教育の再定義や見直し等につながっていると考えられる。

この主体的学びの中で、米国における教育も含めて今、ホットなものが反転授業である。英語でflipped classroomあるいはflip teachingと言うこの反転授業（この言葉はうまく日本語に訳されて定着している）は、ブレンド型学習の一つで、通常は学校で聞く授業を自宅でビデオ学習して、学校では課題解決やグループ学習を行う形態の授業である。いわゆる大規模公開オンライン講座（Massive Open Online Course: MOOC）とはやや異なる面がある。1990年代に米国で始められ、我が国では、高等教育における反転授業の草分けである山内祐平先生¹はじめ、船守美穂先生²、土持ゲーリー法一先生³、森 朋子先生⁴などがリーダーシップをとって進められている。

この授業は、アクティブラーニングの進化的型あるいはアクティブラーニングをも内包する授業形態と言えるものであり、ビデオで予習した内容について、教員が個々の学生に指導を行ったり、グループ学習において学生同士で教え合うピア・インストラクション（PI）等を行うことで、より深い学びに到達できる。前出のハーバード大学のマズール教授は物理学入門の授業でこの反転授業を行った先駆者で、ピア・インストラクションの考案者でもある。さらに自宅学習で学生が疑問に感じた点や興味深く感じた点を中心に授業展開するジャストインタイム・ティーチング（JiT）という手法も考案、実践されている。関西大学の森 朋子先生によると、反転授業のデザインには完全修得学習型と高次能力学習型があり、前者が全員で一定のスキルや知識を習得する典型的反転授業であるのに対し、後者は実際の授業で発展的な課題に取り組んだり視点が異なる者同士でグループを組換えるジグゾーも行う。船守先生は、カレッジマネジメント（リクルート）の中で、米国の反転授業の状況について分析されており、最近も、米国のブレンド型授業について詳細な実地調査を実施されている。

多くの指摘があるように、実は、反転授業

で難しいのは、講義ビデオの収録ではなくて、学校でのグループ学習の設計とその評価である。最近、この授業評価について、京都大学高等教育研究開発推進センターで「深い学習を促すパフォーマンス評価の開発」についての公開研究会が開催された⁵。マズール教授の講演の他、同センターの松下佳代先生⁶のルーブリックを用いたパフォーマンス評価の考え方と方法に関する講演があった。“課題型評価”や学習プロセスをみる“ポートフォリオ評価”と並んで授業評価に必要である“パフォーマンス評価”の一つであるルーブリックは、反転授業等におけるグループ学習の評価や、実習、学外活動等の評価にも用いることができる。このルーブリックの設計においては観点と評価基準を設定していくが、課題に対する教員の評価を明確に示すことができる点で大変優れている。一方で、個々学生の到達度の評価に手間取る場合もあり、この場合はピアサポーター等の援助が必要になる。

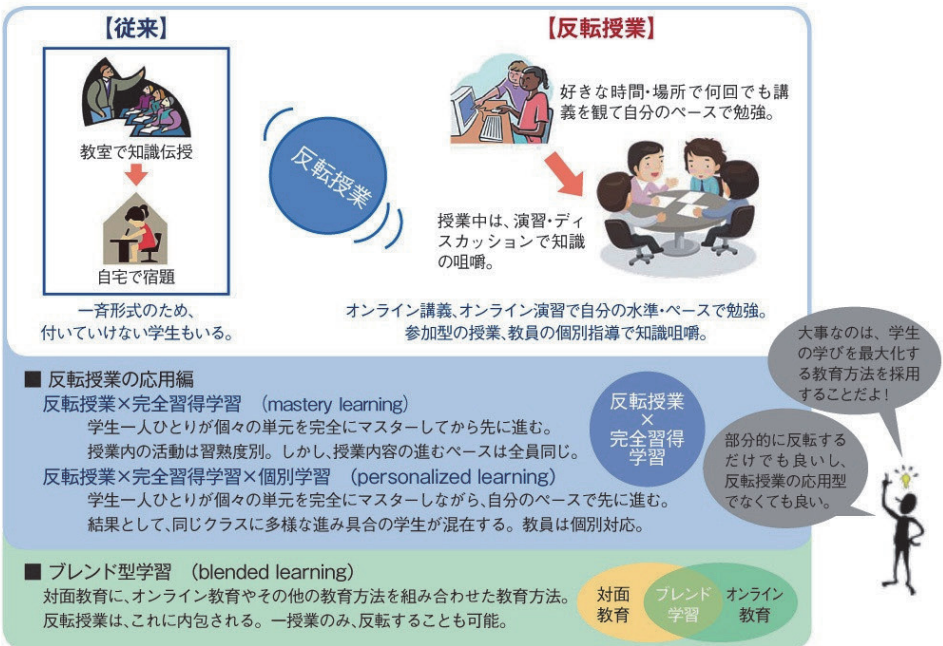
このような反転授業がすべての講義で成立するのは難しいと考えられるし、当然、対面型の授業形態が必要な場合もある。従って、

適切な反転授業の利用によってより、初めて効果的な主体的学びが展開できると考えられる。

就実大学反転授業研究会では、これまで2回の勉強会を開催し、森先生や松下先生にご講演をいただいた⁷。また学内での反転授業もスタートしつつあり、第2回での実施報告に引き続き、今後さらに実施報告も行ってより多くの授業に反転授業が取り入れられていくよう基盤作りを進めたい。

1. 東京大学大学院情報学環准教授
2. 東京大学教育企画室特任准教授
3. 帝京大学教授・高等教育開発センター長
4. 関西大学教育推進部准教授
5. 第89回京都大学高等教育研究開発推進センター公開研究会 2014年10月8日(水)
6. 京都大学教育学研究科・高等教育研究開発推進センター教授
7. 第1回勉強会 2014年9月16日(火)
講師：関西大学 森 朋子 先生
「アクティブラーニングの新しい展開・反転授業」
- 第2回勉強会 2014年12月3日(水)
講師：京都大学 松下佳代 先生
「ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の考え方と方法-PBLを中心に」

図表1 反転授業、反転授業×完全習得学習、ブレンド型学習 (イメージ図)



第1回ブックハンティング報告

平成26年度より、初めての試みで、ブックハンティングを行いました。

ブックハンティングとは？

書店で好きな本を選べるイベントです。選んだ本は図書館の書架に並び、優先的に貸出もでき、選書額の範囲なら何冊でも選ぶことができます。これは、学生協働(図書館業務の一端を、職員とともに、利用者でもある学生が担う活動)の一環で、学生の主体的な学びへのきっかけとなることを期待しています。

ブックハンティングの流れ

書店にて選書(学生) → 図書館が重複等をチェックし、本を購入 → 受入・目録・分類等登録作業 → POP作成(学生) → ブックハンティングコーナー(新着図書コーナー)に一定期間展示 → 貸出を開始

利用者の視点で、次の事に留意して、本を選んでいただきました。

- ☆ 図書館に置いて欲しい
- ☆ 学習、卒業研究、就職活動に必要
- ☆ 講義、レポート作成に役立てたい

2日間に分けて行い、参加した学生さんは計7名でした。

1回目 実施日：11月15日(土)



場所：丸善 岡山シンフォニービル店

2回目 実施日：11月29日(土)



場所：紀伊國屋書店 クレド岡山店

事前の説明会で、重複している本は購入できないと伝えているので、購入したい本のリストを作っていたり、図書館の蔵書を調べていたり、とても用意周到で、真剣かつ楽しそうに本を選ぶ姿は、清々しく、ほほえましいものでした。

その後、選んだ本を紹介するPOPを作成して、ブックハンティング選定図書として、展示しました。



【参加した学生さんの感想】

- 「選書額が大きかったのに、すぐ選ぶことができた」
- 「なかなか自分のお金では買えない、高額な本なので、助かった」
- 「選ぶのが楽しかった、満足しました」

と、好評でした。

“ブックハンティング”という言葉になじみがなかったり、広報期間が短かったり、学内行事と重なったりで、参加者が少ないですが、今後も続けていきたいと考えています。来年度からは、春と秋の2回を計画しています。参加して、本を選ぶ楽しさを体験してください。

(図書館事務室 黒瀬 知子)

ブックハンティング体験記

表現文化学科3年 原田 海愉

11月29日、紀伊國屋書店クレド岡山店で行われた第一回ブックハンティングに参加しました。ブックハンティングとは、あらかじめ決められた書店に集まりその場で自分の好きな本を選ぶ、というイベントです。もちろん選ぶだけで終了ではなく、選んだ本は購入され数日後大学図書館の書架（ブックハンティングコーナー）に並びます。また、一人ひとりの選書額は設定されていますが、金額の範囲内であれば何冊でも選ぶことができます。

当日までの流れとしては、図書館2階のカウンターで申し込みを行い簡単な説明会に参加します。あとはブックハンティング当日を待つだけです。余裕があれば当日までに選書したい本を決め、図書館の蔵書検索（OPAC）で所蔵の有無を確認しておくスムーズな選書ができるでしょう。当日は既定の場所へ集合し、書店の方から諸注意や選書に用いる機械の説明等を受けます。続いて記念撮影を行い、後は書店にある本の中から自由に図書館に置きたい本を選んでいきます。選書後は職員に声を掛け、選書ができているか確認をしてもらえば現地解散となります。所要時間は個人差がありますが、大体1時間前後といったところでしょうか。

以上から、ブックハンティングの概要と当日の大まかな流れが分かっただけかと思います。やはり、実際に書店へ足を運びその場で好きな本を選ぶ点がブックハンティング最大の魅力であると感じました。自分で本を買おうと思っても専門書やハードカバーは値段が高く、学生の立場ではな

かなか手ができませんし、図書館で本のリクエストをする場合、書籍名・著作者等の情報を調べておかなければいけません。欲しい本があらかじめ決まっていればいいのですが、決まっていない場合、書籍名・著作者の記入がちょっとしたハードルになってしまっていると思います。このような悩みを解決してくれるのがブックハンティングでした。今回、私は選書したい本を探さなくとも当日を迎えました。それでも書店で本を目の前に探索していると気になる本はどんどん出てきます。自分好みの本に加え、卒業研究や講義に役立つようなものも入れるとあっという間に選書額を超えてしまいました。単純に本を選んでいくのは楽しいですが、選書額の前後で最終的にどの本を選ぶか考えるのも今までにない楽しい経験でした。



ブックハンティングは様々な視点からのニーズに応えてくれる可能性を持っていると思います。今後、第二回、第三回と定期的に開催されるようなのでまた参加したいです。まだまだ馴染みのないイベントですが、新たな発見や経験ができると思うので、興味があれば是非参加してみてください。



ラーニング commonsのご案内

ゼミのプレゼン・教職の模擬授業の練習をしたい学生さんへ
平成26年6月より、図書館4階の403教室をラーニング commons
として開放しています。どうぞ、ご利用下さい。

利用時間

A	9:10~10:40
B	10:50~12:20
C	12:30~13:00
D	13:00~14:40
E	14:50~16:20
F	16:30~18:00
G	18:10~19:40



パソコン、ホワイトボード、黒板など完備しています。



【夜間開館21時までにご案内】

H26年6月より、図書館は21時まで開館しています。授業が行われている期間
だけですが、利用している学生さんの声を拾うと、「試験やレポート作成の時に助かる」
という、意見が圧倒的でした。開けている側としては、夜遅く帰るのに、危険はない
だろうか、と親心で心配する面もありますが、学習や研究の一助になれば、幸いです。
また、西川原・就実駅に向かう暗い道で、図書館の灯りを見ると、ホッとすることも
おられるのではないのでしょうか？ 図書館は今、もっと身近な存在となるよう、様々
な工夫をしています。ブレイクコーナーでの企画展もその一つです。利用者と共に歩
み、成長の道筋を照らす灯りとなるよう、努力していきたいと思っております。どうぞ、館
内へ一歩踏み入れてみてください。



開催予告

第2回ブックハンティング 平成27年度 春・秋 開催します!!

実施時期：【春】5月中旬から6月上旬 【秋】11月中旬から12月上旬
場 所：丸善 岡山シンフォニービル店，紀伊國屋書店 クレド岡山店
定 員：30名
告知方法：ポスターやHPにて募集します。

好きな本を選んでみたい！ 就活に必要な本が欲しい！ 卒論に必要な本がない！！
と思っている学生の皆さん、どうぞご参加ください。

共翔 第22号

編集・発行
就実大学・就実短期大学図書館

平成27年1月31日発行

〒703-8258 岡山市中区西川原1-5-22 TEL(086)271-8134 FAX(086)271-8275
ホームページ <http://www.shujitsu.ac.jp/category/toshokan>

※館報の題字は押谷善一郎名誉教授の書によるものです。